

「河北潟の自然と文化」編纂事業の提案

大串龍一

河北潟湖沼研究所

〒920-0051石川県金沢市二口町八58

河北潟湖沼研究所が出来たとき、私はこの研究所の事業の一つの柱として河北潟の歴史と現状についての正確な記録を作ることと考えました。これは機会があるごとに私の意見として発表しましたから、ご存じの方も多いかと思えます。ここで私の考えるプランについて、まとめて書いておきたいと思えます。

河北潟については、すでに幾つかの本や市町村史に記述があり、地元新聞に特集として連載されたこともあり、また干拓事業やその後の営農、水質管理などについて石川県や、関連する農水省などの機関がさまざまなデータをとりとめた報告を出しています。それで河北潟の状況についてはもうよく判っていると思っている人も多いようです。しかし私たちが河北潟について、その自然や歴史を総括的に理解し、また人に紹介しようとするとき、これらの問題を適切に取りまとめた文献資料が無いことに困惑します。小さいながらも河北潟湖沼研究所という名前の研究所があるのに、この河北潟の歴史と自然環境に関する紹介をするのに必要なまとまった文献がまだ我々の手元に無いということは、この河北潟に関心を持った人達にどう説明してよいか判りません。

河北潟をひとつのまとまった生態系として、またここで生きてきた人達と自然環境とが共同して造り上げてきた北陸の文明の産物としてきちんと記録し、信頼できる地方誌として誰でも

利用できるようにしておくことが、河北潟湖沼研究所のひとつの使命ではなからうかと思えます。これはこの地域の人達が共有する遺産としてだけでなく、こうした特長ある自然と文化の作り上げたものを世界に紹介するという上でも、地球環境の面からも大きな意味があります。地方誌というものの重要性が、世界史の上からもますます大切になってきているのです。

私の考えるところでは河北潟とそれをとりまく地域の自然と歴史を記録して残しておくことは特長あるこの地域の自然環境と生活文化からみて、次のような点からとくに大きな意味を持っていると思えます。

1) 日本海に面した海岸砂丘の背後に出来た汽水性の潟湖であること。このタイプの潟湖は干拓しやすく、また自然の洪水や地震で消失しやすいために、現在ではその多くが消滅してしまっており、現在では残っていない。そのためにここに成立していた特殊な生態系とその動植物、湖畔の人間の生業や生活様式、村落社会の姿は、比較的最近まで残っていたが今では忘れ去られようとしている。しかしこれが地域の自然と文化の今後を考える上で重要な意味をもっていること。

2) 1673年以来、歴史に残る数度の干拓とくに1963 - 1971年の最後の干拓で出来た広大な干拓地の自然環境ならびにそこを舞台とした人々の開発活動の推移が、まだ記録にも関係者

の記憶にもかなり良く残っている上に、今後さらに自然環境の上でも産業活動の上でも新しい変化が予想されるので、これまでとこれからの正確な記録を残すことはこの日本の国土利用の上で、また東アジアの各地に広い面積を占めている湿地生態系の保全と活用の上で重要な資料となるであろうこと。

ことに北陸は夏の高温と冬の多雪というアジアの北と南の気候的特性を兼ねている点で、その資料は熱帯から冷温帯にわたる東アジアの広い地域の参考となる点が多いと考えられる。

3) 比較的近年まで古い自然環境と生活様式が続いていたから、現在では不完全あるいは断片的なものが多いが、自然環境や動植物、湖畔の村の生活や生業に関する記録、遺物、遺品などがいろいろ残っており、さらにその時代を生きてきた人達の記憶もまだ失われていないから、それらを適切にまとめることによって、とくに近代の河北潟とそれをとりまく状況が記録上で再現できる可能性が大きいこと。

ただしこれらのものや記憶はいま急速に消滅しつつあるから、できるだけ早く収集と保存に努める必要がある。

4) 1971年に完成した河北潟干拓事業は、日本における水田稲作のための農業用地造成を目的とした最後の大型干拓であって、その後の入植地の移り変わりは、その後の有明海の諫早干拓などによく表れている日本の現代農業の混迷を反映し、また自然環境保全の考え方の変遷を示している点で貴重な例であること。

こうした地方誌あるいは地域文化史に関する資料の集大成は、これまでも沢山の例がありますが、これらの本や報告にはそれぞれにいろいろ問題があります。それは編集の仕方からみて大きく分けて2つに集約されます。ひとつは集まったデータを一人もしくはごく少数の人に集中して書き下ろす方式で、全体としてまとまりが良く読み易いものになりますが、一方、

その中心となる執筆者の癖や専門の偏りがそのままに出て、歴史や環境の中の大切な部分が欠落したり、ある一方的な意見だけが取り上げられて公平な見方ができないものになることがあります。

もう一方は沢山の関係者がそれぞれの専門の部分だけを取り扱った分担執筆のもので、それぞれの部分の資料的価値は高いのですが、全体として通読するようになっていないために、それぞれの部分が地域の自然生態系と歴史・社会の中でどのような位置を占めているかを理解することが出来ず、地域の統一なイメージが湧かないものです。一般的にいま全国で沢山出ている地方誌にはこの形が多いようです。

このように2つのタイプはそれぞれに長所・短所があります。第一の総合的な地方誌の場合には執筆者に適任な人を得るときは、資料の取捨選択がうまく行われて通読しやすく、読み物としても成功して地域のイメージを高めることが出来ますが、多くの例では平板な事実の羅列による表面的な地域の紹介に終わって、読み通そうという意欲が起りにくいだけでなく、あとから資料として利用しようとしても、その個々の内容の正確さが保証出来ないことがしばしばあります。これをいくら集積しても地域の理解が深まることはありません。

第二のタイプでは、一つ一つの記録は確かな資料として蓄積されます。このような作業は地方誌の基礎としてどうしても必要なものです。しかしこれだけでは、地域の環境と歴史文化の総合的な認識には達しません。それとこのような方式では、たまたま適当な分担者がいなかったりしてその地域の理解のために重要な部分が欠けていても、気が付かなかつたりすることがよくあります。歴史や民俗的な記述が非常に詳しいのに自然環境との関わりが全く判らないものや、地形や植生が正確に記述されているのに、それが長い間の人間の営みでどのように変容して現在に至っているかに触れていない」地

方誌」が少なくありません。総合的な地方誌を編纂するというはっきりした問題意識を持って、出てくる資料全体を見渡しながら欠落した部分や不十分な部分を判断して、それを補う司令部的なところがないと、言い換えれば戦術だけがあって戦略がないと、いつまで経っても地域の全体像と、そこが他の地域とくらべてどのような点で共通であり、どのような点で違っているかを把握出来ません。

ちょっと不完全なたとえですが、立派な建物を造るには良い材料と良い設計図が必要です。家の図面ばかりを引いていても、良い材木や煉瓦ばかりを造っていても良い建物にはなりません。そこで私の考えとしては、差し当たってまずしっかりでした材料を集めながら(つまり信頼できる資料を集積しながら)、そろそろ図面を引き始めたほうが良いのではないかというものです。

その図面の大きな基本図として、私は以下のようなものを考えています。

河北潟の自然と文化

1) 河北潟の現状

自然環境、とくに景観からみて
社会・行政地域と産業の概要

2) 河北潟の地史

日本海の形成と内灘砂丘・潟湖の成立
砂丘と潟湖の地史の変遷

3) 河北潟の生物相の成立

現在の動植物相と生物群集
潟湖と周辺の湿地の動植物相の成立
現在とくに注目すべき動植物と過去の記録

4) 湖畔の村や町とその生活の変遷

江戸時代から昭和干拓まで

干拓後の状況、湖畔の村の解体と新しい入植農家の村の成立

5) 残存水面の変遷と現状

現在の湖水の形と各部分の状態
かつての湖水の状態と生物相
河北潟の漁業の推移と現状

6) 河北潟干拓地の変遷

干拓の歴史と最後の昭和干拓
農地開発の目標の変転
入植農家の努力目標と努力
干拓地農業の現状

7) 河北潟干拓地の生態系の遷移

干陸後の景観の変遷
動植物相の30年の変化と現状
考えられる今後の問題

ここに書いた項目はやや堅苦しくて、これをそのまま本の章や節の表題にすると読者に敬遠されるでしょう。これは取りあえずの準備作業として、どのようなテーマを扱ったら良いか、そのためにはどのような資料を収集してゆくべきかという目標についての一つの案に過ぎません。そのようなものとしてお読み頂ければ幸いです。これをまとめて一つの本にする場合には、読みやすいようにあるいは読者に受入れられるような工夫が、更めて必要となるでしょう。

先に述べたように、このまとめには地域の記録として残すべき資料集としての意味と、この地域の紹介という2つの目標があります。この2つはやや食い違った点があります。資料集としては出来るだけ詳しいことが望ましいけれども、県内、北陸地域さらに全国の関心ある方々への紹介としてはあまり詳しいものは、経費の点でもまた読み通す時間の点でも無理があるということです。この困難を回避するために、市

町村史や地方史にはしばしば資料集と通史を分けて2つの本とすることが行われています。こうした問題はある程度の資料が集まった段階で、真剣に検討する必要があるでしょう。